

豊かなかかわり合いの中で、今と未来にいきる

—自分が好き、ひとが好き、運動が好き—

清水 香保里（文教大学教育研究所客員研究員）

Start Living a More Active and Fulfilling Life from Now into the Future
through Fruitful Interactions
— Love yourself, People, and Exercise —

SHIMIZU KAORI

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

要 旨

令和2年度より児童の自尊感情を育む学校研究に取り組んでいる。今回は、令和4年度から行ってきた体育科を通しての実践で、主に令和5年度の内容について報告する。研究に関わる児童と教師の実態調査を行い、学年ごとに取り組んだ体育科の技能と体力そして自尊感情の向上をねらった実践報告である。自己効力感、自己有用感、自己調整力を具体化したものを手立てとして示した。

1. はじめに

新型コロナウイルスが猛威を振るい始めてから4年。少しずつ落ち着いてきた昨今、学校では、以前と近い状態まで学校行事が行われ始めてきた。子ども達が生き生きと活動できる環境が増えてきたことは喜ばしいことだが、コロナ禍以降、全国的に不登校傾向の児童が増えたことや、児童の体力の低下、教師の長時間労働問題、さらには昨今のゲリラ豪雨、地震、猛暑など自然災害が加わり、新たな不安も芽生えてきている。

そのような環境の中、川越市立川越小学校では令和2年度より自尊感情に関する研究を、様々な教科領域を通して行ってきた。令和4年度から体育科で取り組むことになった。

2. 学校研究の概要

(1)研究の目的と研究仮説

本校の学校研究の課題は、「豊かなかかわり合いの中で、今と未来にいきる」である。

本研究の目的は、児童が様々な出来事に直

面し、そこで起こりうる問題に対して人との関わり合いを通して自分の考えをもち、自分なりの生き方を考えることができる児童を育成することにある。

本校の児童は、思いやりのある優しい児童が多い反面、不登校や登校渋り、打たれ弱さ、自尊感情の低さが実態としてある¹⁾。

このような児童の実態から、自尊感情を向上させるため、令和2年度は算数・体育・道徳・特活で、令和3年度は学級経営を整えるべきであるという観点から、道徳と特活で研究を進めてきた。

そして令和4年度からは体育科のみに研究を絞り、令和5年度は、副題を「自分が好き、ひとが好き、運動が好き」として体育科の技能や体力と自尊感情の向上を目指して取り組んでいる。

つまり、豊かなかかわり合いの中で体育科を通して、自尊感情と技能・体力を向上させることを研究のねらいとするものである。

そもそも「豊かなかかわり合い」とは何か。

本校では、自己効力感、自己有用感、自己調整力の3つを高めていくことで、豊かなかわり合いができるかと捉えている。

自己効力感とは、「目標を達成するための能力を自らが持っている」と認識すること。「自分ならできる」、「きつとうまくいく」と言える認知状態である²⁾。自己評価、振り返り、教師の発問に対する課題解決などで高めている。体育は、「力いっぱいやるから楽しい」のである。

自己有用感とは、他人の役に立った、他人に喜んでもらえたなど、相手の存在なしには生まれてこないもので、自分に対する他者からの評価が中心のものと捉えた³⁾。他にも、人の役に立つこと。他者からの自分に対する評価として捉えられている⁴⁾。児童同士の学び合い（協力、競争・勝負、相互評価）や教師の指導・支援などで高めている。体育は、「一緒にやるから楽しい」のである。

自己調整力とは、「主体的に学習に取り組む態度」について、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることにに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面を評価することが大切だと文科省が求めているものの一つである。「これならできると」児童が感じられるように、工夫された学習過程や教材選定を行っていく。体育は、「自分の力に合った運動をするから楽しい」のである。

自己効力感、自己有用感、自己調整力が合わさって、自尊感情が高まっていくことで「自分が好き」、「ひとが好き」、「運動が好き」になるのではと考えた。

「自分が好き」は自己効力感を高めること、「ひとが好き」は自己有用感を高めること、「運動が好き」は自己調整力を高めることと捉えている。この「自分・ひと・運動」との豊かなかわりを重視した体育授業の工夫改

善を図ることにより、児童の自尊感情及び技能・体力を高めることができると考え、本研究主題を設定した。

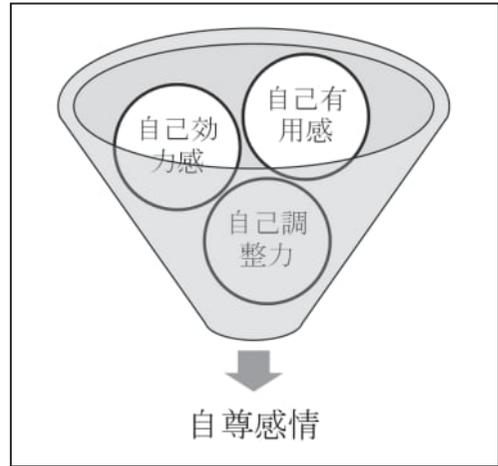


図1：自尊感情のイメージ図

以上の内容を基に研究仮説を3つ設定し、それに対する手立てを行った。

「仮説1 自分のよさに気づき、それを活用することができれば、自己効力感が高まるであろう。」

「仮説2 友達との温かい関わりを意図・計画的につくっていけば、共感的な人間関係が生まれ、自己有用感が育つであろう。」

「仮説3 学習計画や学習活動の工夫ができれば、自己調整力と技能・体力の両方を向上させることができるであろう。」

(2)研究に関わる教師の実態

研究を行うに当たって、体育科指導を行う教師の意識について実態調査を行った。

目的 : 体育授業に関する現状調査
 方法 : 質問紙 (10問)
 調査日 : 令和5年6月、令和6年2月
 調査人数 : 32人 (担任24人、担外8人)

1 体育の指導は好き（得意）ですか。

	6月	2月
①好き	19%	24%
②どちらかといえば好き	47%	59%
③どちらかといえば嫌い	31%	17%
④嫌い	3%	0%

2 1で①②と答えた方、その理由は何ですか。（複数回答可）

	6月	2月
①研究が楽しい		5%
②児童が体育好きで一生懸命	16%	20%
③技の上達、体力向上が図れた	10%	10%
④教材研究、指導計画が楽しい	6%	3%
⑤学級経営の柱にできた	3%	2%
⑥指導しやすかった	2%	0%
⑦自分が運動好き	11%	11%
⑧その他	1%	0%

3 1で③④と答えた方、その理由は何ですか。（複数回答可）

	6月	2月
①研究が楽しくない		0%
②児童が楽しそうでない	0%	0%
③成果が出なかった	0%	0%
④指導計画が難しい	6%	2%
⑤教材研究、準備に時間がかかる	5%	1%
⑥指導の仕方が分からない	3%	0%
⑦自分が運動嫌い	2%	1%
⑧その他	1%	2%

「体育の指導は好きか嫌いかな」は、6月は約70%が好きで約30%が嫌いであったが、2月では、83%が好きで17%が嫌いという結果であった。好きな理由は、「児童が体育を好

きで、一生懸命に取り組むから」が最も多く、続いて「自分が運動好き」、「指導したことで技が上達したり、体力の向上が図れたりするから」が多く、6月2月共に同じ理由であった。好きではない理由は、「指導計画を立てることの難しさ」や「教材研究や準備に時間がかかる」ことであった。

研究を通して、体育科が好きな教師が研究後に増えたことが伺えた。また、令和6年6月の調査⁵⁾では、88%が好きで12%が嫌いという結果であり、益々体育科の指導が好きな教師が増えてきたことが分かる。

4 今年度の体育で指導しやすいと感じた運動領域は何ですか。（複数回答可）

	6月	2月
①体づくり運動系	10%	6%
②器械運動系	16%	10%
③陸上運動系	7%	5%
④水泳運動系	2%	2%
⑤ボール運動系	15%	21%
⑥表現運動系	5%	0%
⑦保健	5%	2%
⑧ない	0%	1%

5 今年度の体育で指導しにくいと感じた運動領域は何ですか。（複数回答可）

	6月	2月
①体づくり運動系	3%	3%
②器械運動系	10%	7%
③陸上運動系	19%	3%
④水泳運動系	11%	13%
⑤ボール運動系	7%	1%
⑥表現運動系	15%	9%
⑦保健	1%	2%
⑧ない	0%	2%

興味深いことは、指導しやすい領域としにくい領域に、ともに器械運動系と陸上運動系が入っている。例えば器械運動系では、手立てや場の工夫などが分かりやすいといったや

りやすさと、高学年になると技の難易度が上がり教えることが難しいという指導しにくさがあるようだ。

3. 学校研究の内容

(1) 体育科の授業評価

体育科の授業評価は、診断的評価（事前的評価）として5月に全児童へクロームブックで質問を行い、同様の内容を総括的評価（事後的評価）として2月にも全児童へ行った。

授業研究会で取り扱った単元については、体育の授業終了時に毎時間、形成的評価をクロームブックで行ってきた。これは、主に単元のなかの授業を評価する方法で、高橋ら（1994、1995）が作成した方法の4次元9項

目の調査票⁶⁾を授業終了時に学習者へ配布した。「はい」（3点）、「どちらでもない」（2点）、「いいえ」（1点）で回答し集計した。

表1：形成的評価の質問項目⁶⁾

体育授業についての調査	
小・中学校 年 組 男・女 番 名前 [(月 日)]	
◎今日の体育の授業について評価します。下の1～9について、あなたはどう思いましたか。 当てはまるものに○をつけてください。	
1 ぶかく心のかんこことや、かんどうすることがありましたか。	(はい・どちらでもない・いいえ)
2 今までできなかったこと(運動や作戦)ができるようになりましたか。	(はい・どちらでもない・いいえ)
3 「あっ、わかった!」とか「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。	(はい・どちらでもない・いいえ)
4 せいっぱい、ぜんりょくをつくして運動することができましたか。	(はい・どちらでもない・いいえ)
5 楽しかったですか。	(はい・どちらでもない・いいえ)
6 自分から進んで学習することができましたか。	(はい・どちらでもない・いいえ)
7 自分のためてむかかって何回も練習できましたか。	(はい・どちらでもない・いいえ)
8 友だちと協力して、なかよく学習できましたか。	(はい・どちらでもない・いいえ)
9 友だちとおたがいに競えたり、競けたりしましたか。	(はい・どちらでもない・いいえ)

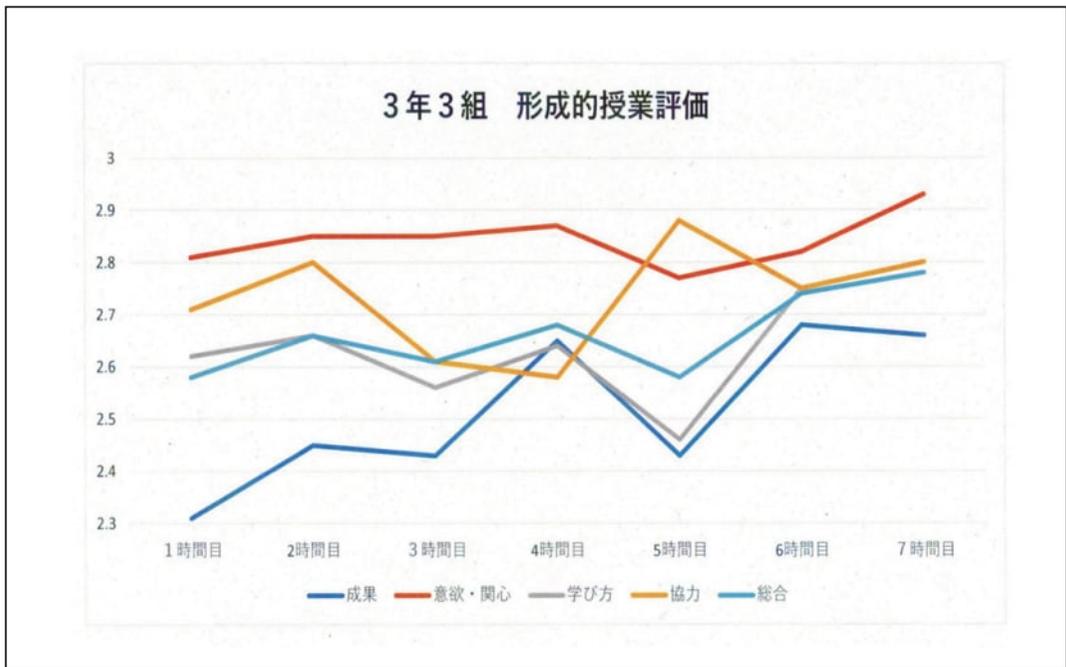


図2：形成的評価グラフ

豊かなかわり合いの中で、今と未来にいきる—自分が好き、ひとが好き、運動が好き—

1時間目は、意欲・関心、協力、学び方、総合、成果の順に数値が高い。全体的に少しずつ上昇しているが、5時間目では大きく協力が向上し、他の部分が低下している。これは、(表2)の単元計画の「指導と評価の計画」を見ると、5時間目のねらいが協力であ

り、ここから他チームとの対戦が始まっているため、新しい取組が入り、協力以外の部分が低下したと考えられる。そして6時間目では、やり方も分かり全てが上昇したことが分かる。

表2：単元計画の「指導と評価の計画」

(3) 指導と評価の計画 (7時間扱い) 本時は○印 6/7							
時間	1	2	3	4	5	6	7
ねらい	安全に気をつけて協力して準備や片付けをしよう。	チームで協力し、ゲームをしよう。	打ちつけて、つないで、ゲームをしよう。	コツを教え合って、チームの力を高めよう。	仲間と協力して一人一人のよさを互いに伝えよう。	チームのよさに応じた作戦を選ぼう。	川小カップで勝利を目指そう。
指導内容	・学習の進め方 ・準備、片付けの仕方 ・試しの運動	・ゲームの仕方	・つなげ方	・打ちつけ方、つなげ方のコツ	・一人一人のよさの見つけ方	・チームの特徴に応じた作戦の選び方	・まとめのゲーム
学習過程	1 集合、挨拶、健康観察 2 本時のねらいと内容の確認 3 オリエンテーション ・授業の目標 ・学習の進め方 4 チーム編成 5 用具の準備 6 準備運動、補強運動 7 試しの運動 8 片付け 9 集合、学習の振り返り、学習カードの記入 10 まとめ 11 次時の予告 12 整理運動 13 挨拶	1 集合、挨拶、健康観察 2 準備運動、補強運動 3 感覚つくりの運動(片手or両手ブレム) 4 用具の準備 5 ベーシックタイム チーム内連続ブレム練習 6 本時のねらい、内容の確認 7 3対3ゲーム 8 片付け 9 集合、学習の振り返り、学習カードの記入 10 まとめ 11 次時の予告 12 整理運動 13 挨拶	2 準備運動、補強運動 3 感覚つくりの運動(片手or両手ブレム) 4 用具の準備 5 ベーシックタイム チーム内連続ブレム練習 6 本時のねらい、内容の確認 7 3対3ゲーム 8 片付け 9 集合、学習の振り返り、学習カードの記入 10 まとめ 11 次時の予告 12 整理運動 13 挨拶	2 準備運動、補強運動 3 感覚つくりの運動(片手or両手ブレム) 4 用具の準備 5 ベーシックタイム チーム内連続ブレム練習 6 本時のねらい、内容の確認 7 コツ探し(個人→全体共有) 8 3対3練習(応用) 9 3対3ゲーム 10 片付け 11 集合、学習の振り返り、学習カードの記入 12 まとめ 13 次時の予告 14 整理運動 15 挨拶	2 準備運動、補強運動 3 感覚つくりの運動(片手or両手ブレム) 4 用具の準備 5 チャレンジタイム チーム内 ブレム→アタック練習 6 本時のねらい、内容の確認 7 作戦会議(一人一人のよさを話し合う) 8 3対3ゲーム 9 作戦会議(チーム分析) 10 片付け 11 集合、学習の振り返り、学習カードの記入 12 まとめ 13 次時の予告 14 整理運動 15 挨拶	2 準備運動、補強運動 3 感覚つくりの運動(片手or両手ブレム) 4 用具の準備 5 チャレンジタイム チーム内 ブレム→アタック練習 6 本時のねらい、内容の確認 7 作戦会議(チームの特徴に応じた作戦選) 8 3対3ゲーム 9 作戦会議(チームの特徴に応じた作戦選) 10 3対3ゲーム 11 片付け 12 集合、学習の振り返り、学習カードの記入 13 次時の予告 14 整理運動 15 挨拶	6 本時のねらい、内容の確認 7 作戦会議(使う作戦、動きの確認) 8 3対3ゲーム① 9 3対3ゲーム② 10 作戦会議③ 11 3対3ゲーム③ 12 3対3ゲーム④ 13 片付け 14 集合、学習の振り返り、学習カードの記入 15 まとめ 16 整理運動 17 挨拶
評価項目	知・技 量・育・意 態 方法 場面	①	①	①	②	②	①
方法	観察・学習カード	観察・学習カード	観察	観察・学習カード	観察・学習カード	観察・学習カード	観察
場面	5, 8	7	7	7	7	7, 9	8, 9, 11, 12

表3：ネット型ボールゲームの発言チェック表

10月19日(木) 4年3組()先生

種類	具体例	カウント	数
発問	・得点を入れるにはどうすれば(どこをねらえば)いいかな? どこがゴールなの? ・どの位置から/どこを狙ってアタックするといいいかな? ・ボールを持っていないときは、どうやって動くといいいかな? ・どちらの方が打ちやすいかな? ・どうやって(作戦を)決めていくといいいかな? ・狙う位置は高い方がいい? 低い方がいい?	正T	7
一般的肯定	・いいアタック(スマッシュ)だったね ・よく動いているよ ・味方にいいパスが出せたね/次につなげやすいパスが出せたね ・いいね/上手/すごい ・はやい! ・うまい! ・ナイス!	正正正正正正正正正正	52
具体的肯定	・相手がいらない場所を狙ってアタックできたね ・味方が取りやすい場所で〇〇なパスが出せたね ・ボールを正面で拾うことができたね ・ボールをもっていないときに〇〇動けたね ・強い、いいアタックができたね ・守りの姿勢が、重心が低くていいね ・聞く姿勢がいいね、/体育座りの仕方がいいね ・前へならえがそろっているね ・〇〇を狙って強いアタックができたね ・見方が取り取りやすいところに渡せたね	正正正正正正正正正正	34
一般的矯正	・強くアタックしよう ・よく狙ってアタックしよう ・もっとたくさん動いてみよう ・味方にいいパスを出そう ・相手が拾いづらいところに落とそう	正正	9
具体的矯正	・相手がいらない場所を狙ってアタックしてみよう ・もっと強くアタックしてみよう ・味方が取りやすい場所でも〇〇なパスが出そう。 ・ボールを正面で拾ってみよう ・ボールをもっていないときに〇〇動いてみよう ・(準備運動で...) つま先をそろえて.../床に穴があくくらい.../肘をのばして...	正正正正	20
否定	・だめ ・下手 ・もってがんばれ ・もってできるでしょ		0
励まし	・いけいけ! ・がんばれ! ・できるできる! ・その調子! ・大丈夫大丈夫! ・ファイト! ・一位を取ろう! ・がんばろう! ・おしい! ドンマイ!	正正正正正正正正正正	48
計			170

(2)発言チェック

高橋ら(1994、1995)が作成した「教師の相互作用行動の観察カテゴリーと定義」⁶⁾を使って、教師の授業内での発言をチェックした。これは、①発問、②一般的肯定、③具体的肯定、④一般的矯正、⑤具体的矯正、⑥否定、⑦励ましの7つの教師の言葉がけに区分している。それを本校の授業に沿って、短距離走、リレー、長距離走、ハードル、(走り)幅跳び、(走り)高跳び、マット運動、跳び箱運動、鉄棒運動、ベースボール型ボール運動、ゴール型ボール運動、ネット型ボール運動に分けて作成した。

(表3)は研究授業を行った日の4年3組の記録である。一般的肯定、具体的肯定、励ましが多いことが分かる。言葉がけの総数が100を超えていて多いことが分かる。

(3)心と体の健康観察

児童自身が自分の体調や心の状態を自己分析するきっかけとして、養護教諭が作成したものが、「心と体の健康観察」である⁷⁾。

そもそもこれは、コロナ禍の児童の体調を知るために令和2年6月から現在まで毎月続けているものである。これによって、担任や養護教諭が児童の状態を知るとともに、面談等も行っているため、早期発見早期対応ができています。

4. 授業の実践

本校独自の体育授業スタイルを「川小スタンダード」という。

準備運動の後半には、体力向上の運動として、3分間走または持久力の高まる運動をする。主運動は、ベーシックタイムとチャレンジタイムで行っていく。

ベーシックタイムとは、共通学習または

共通課題で、以前の体育では、「ねらい1」とされていたものに当たる。その単元で最低でも身に付けるものになり、ボール運動では

基礎ゲームになる。

チャレンジタイムは、個別学習または個別課題で、以前の体育では、「ねらい2」とされていたものに当たる。自分の力に合わせて身に付けるものになり、ボール運動では応用ゲームになる。

<川小スタンダード>

- (1)集合・整列・あいさつ
- (2)準備運動
 - ①準備運動+領域に応じた準備運動
 - ②体力向上の運動(3分間)
- (3)場の準備
- (4)ねらい(教師)とめあて(児童)の確認
- (5)主運動
 - ①ベーシックタイム(共通課題)
 - ②チャレンジタイム(個別課題)
- (6)後片付け
- (7)整理運動
- (8)本時のまとめ(教師)と振り返り(児童)

評価(自己評価・相互評価・教師評価)
- (9)体調確認・あいさつ

この他に、笛や太鼓の指示を年度当初に共通化して指導している。

令和5年度に行った7つの授業研究会について実践順に報告する。

(1)4年生 ネット型ゲーム

「キャッチバレーボール」

(単元名)「思いをつなげて1・2・アタック」

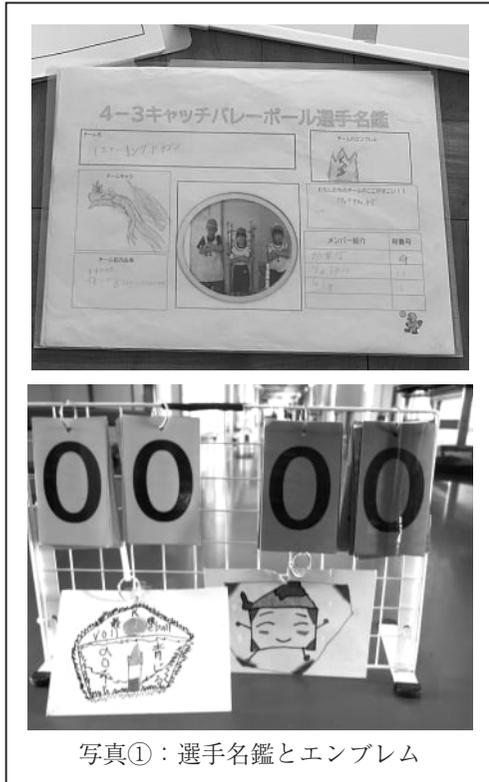
<4年生 仮説に対する手立て>

- (仮説1)自己効力感
 - ①選手名鑑の活用
 - ②ペア・グループでの話し合い活動
- (仮説2)自己有用感
 - ①ファイトコール・ドンマイコール
 - ②自分のチームに愛着をもつ工夫
 - ③所属感を高める工夫
- (仮説3)自己調整力
 - ①チームデータの記録・視覚化
 - ②ゲームを意識した基礎練習

簡単なネット型のゲームである。自作のネットを作り、ペアチームで練習を重ねてから対戦し、自分のよさ、チームのよさを出し合い、それを作戦に生かした。試合前のファイトコールや、試合中に聞こえる「ドンマイ」、「ナイス」のかけ声が多く、楽しく温かい雰囲気での授業であった。

「選手名鑑」とは、チームや個人の良さを記録した写真入りのもので、授業を重ねていく中で記録を増やした。具体的には、試合の挨拶でお互いの選手名鑑を交換し、相手のよさを知った上で対戦に臨むのである。試合後は、相手チームの良さを付け足していく。

「チームに愛着をもつ工夫」は、チームでエンブレムを作り、得点板につけて活用した。



「チームデータの記録・可視化」は、授業の流れやめあてなどを添付したプラスチック段ボールの裏面を活用して可視化した。本校では、学年ごとに色分けした物を立体的に作り活用している。(通称「カラ段」という)



(2)1年生 ゴール型ゲーム「シュートゲーム」
(単元名)「かいぞく王に、おれはなる！たからをゲット！川小かいぞくだん」

<1年生 仮説に対する手立て>

(仮説1)自己効力感

①振り返り活動

(仮説2)自己有用感

①仲間意識をもたせるための工夫

②ルールの工夫

(仮説3)自己調整力

①場や用具の工夫

②指導計画の工夫

簡単なゴール型のゲームである。「海賊王に、俺はなる！」という設定で、宝の地図を基に授業を進めていた。ゲームは、真ん中にカラーコーンの的を置き、チームで協力してボールを当てる。相手チームは全力でそれを阻止するものであった。ストーリーのある授業で児童がとても楽しそうであった。最後にとびきりのお宝をゲットできるのが魅力であった。

このように低学年は、ストーリー性のある授業を組み立てることにより、より一層意欲

的に取り組むことができる。学習の流れを地図化し、最終目標の宝箱があり、見た目に楽しい仕掛けが盛り込まれていた。



写真③：
地図と宝箱

(3) 2年生 ボール投げ入れゲーム 「ボールゲーム」

(単元名)「思いをつなげ! ハッピーボールゲーム」

<2年生 仮説に対する手立て>

(仮説1) 自己効力感

- ① チーム内での話合いや振り返り
- ② ポイントの掲示物

(仮説2) 自己有用感

- ① ファイトコールや「ナイス」「どんまい」などの声かけ

(仮説3) 自己調整力

- ① 教材教具の工夫
- ② 指導計画の工夫

簡単なネット型のゲームで、バレーボールの基礎となる。ねらったところに投げ入れたり、ボールの落下位置に移動してキャッチをしたりする。数種類のボールなどを投げる用意が出来たら、「行くよー」と声をかけ、相手が「ハッピー」と応えたら試合が始まる。温かい声かけで行った笑顔いっぱいのゲーム

であった。

この単元は、熊本大学教育学部付属小学校で開発されたネット型のボールゲーム「ボンバーゲーム」を参考に行った。ビニル袋製のボール（ビニル袋に緩衝材を入れて、結び目をつけたもの）を使用することで、オーバーハンドスローを身に付けさせた。このボールをハッピーボールとし、その他に1つ柔らかいボールをラッキーボールとして計3個をかごにセットしていた。



写真④：ハッピーボール2個とラッキーボール1個

挨拶やファイトコール、「ナイス」「どんまい」などの声かけ、「行くよー」と「ハッピー」、合間のほめほめタイム（作戦タイム）の声かけなど、児童の声が絶えず聞こえていた。お互いに声を出して褒め合いながら楽しそうにゲームに取り組んでいた。教師が多くの言葉がけを仕掛けたことが、自己有用感を高める一因になったと考えられた。



写真⑤：
ゲーム中と話合い中の児童の様子

(4)おひさま 2組 用具を操作する動き
「体づくりの運動遊び・体づくり運動」
(単元名)「みんなでレベルアップ!めざせ!
ボールマスター」

<おひさま 仮説に対する手立て>

(仮説1)自己効力感

- ①振り返りの充実

(仮説2)自己有用感

- ①いいね!みてね!タイム
②仲間意識をもたせるための工夫
③チャレンジシートの活用

(仮説3)自己調整力

- ①ユニバーサルデザインの視点から
個の能力に応じた場や用具の工夫
②オリエンテーションの工夫

特別支援学級おひさま2組の授業である。音楽に合わせて軽快に準備運動をした後、2人組になってボールを様々なやり方でパスをしたり、新しいやり方を見つけたグループを紹介したり、それを真似たりした運動遊びであった。

後半は、3つの活動場所にペアで移動し、順にそれぞれの技に挑戦した。写真⑥のフラフープにボールを入れる技はなかなか難しいのだが、短い時間で何度も挑戦し、児童の成長が伺えた。ゲームのマリオの曲を使った、マリオの世界観での楽しい雰囲気であった。

「いいね!みてね!タイム」は、ペアで考えた運動や上手に行えた動きのコツなどを全体に広げていた。教師が見て回り、児童に確認をして全体に広げていたのが印象的であった。また、チャレンジシートを使って、ペアで協力して課題に取り組んでいた。



写真⑥: フラフープにボールを入れる



写真⑦: 「いいね!みてね!タイム」のマークとチャレンジシート

(5)3年生 ゴール型ゲーム「ポートボール」
(単元名)つなげ!パス、シュート、チームの心! KIZUNAボール

<3年生 仮説に対する手立て>

(仮説1)自己効力感

- ①チーム内での話し合い活動(絆タイム)

(仮説2)自己有用感

- ①肯定的な声かけの提示
②少人数チーム・全員シュートボーナス

(仮説3)自己調整力

- ①少人数チームによるゲーム
②技能ポイントを意識した提示や感覚作り運動

3人組で元気いっばいの「kizunaボール」(ポートボール)であり、児童の人数が少ないので、一人一人がしっかりと動いてパスをつないでいた。1チームは3人だが、中には2人でプレイをしているチームもあった。ゴールの近くになると、素早く1人が台に乗っ

てボールを受け取って得点につないでいた。試合前のファイトコールや、「ナイス」「ドンマイ」などの声かけがとても盛んであった。

途中の作戦タイムでは、チームの仲間がくっついて夢中になって話合い、次の試合に生かせるよう練習もしていた。きびきびとした動きが気持ちのいい体育の授業だった。

1チームの人数を3人とし、少なくすることにより、ベーシック・チャレンジタイムともにボールに触れる機会を増やし、技能の向上を図っていた。また、少人数チームによってコミュニケーションをスムーズに行えるようにし、チーム内でのアドバイスなどを活発に行えるよう支援していた。



写真⑧：学習カードをもとに話合い



写真⑨：ポートボールのプレイ

(6)5年生 ゴール型ゲーム

「バスケットボール」

(単元名)「みんなが活躍!バスケットボール」

<5年生 仮説に対する手立て>

(仮説1)自己効力感

- ①チーム内での話合い
- ②いい所見つけシート

(仮説2)自己有用感

- ①「ナイス」「どんまい」(パスの時)
「〇〇さん(名前を呼ぶ)」などの声かけ
- ②所属感を高める工夫

(仮説3)自己調整力

- ①技能ポイントの揭示
- ②シュートマスターカードの作戦
- ③アダプテーションを取り入れたゲーム

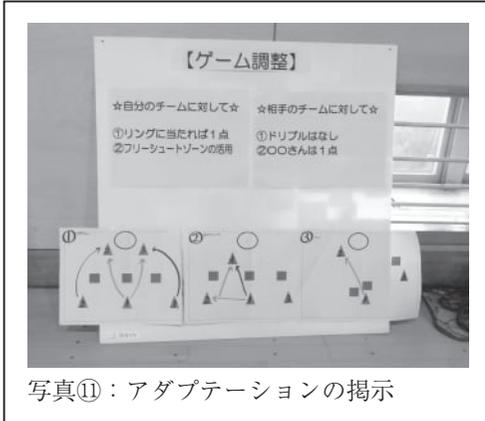
5年生が実施したバスケットボールは、ハーフコートでゲームを行うことで、1ゲーム単位内で多くの児童がゲームに参加でき、技能の向上や運動量の確保につながっていた。

アダプテーション(ルール調整)を取り入れることで戦術面の話合いが進み、ゲームの面白さを追求した授業であった。

「試合一作戦タイム一試合」の流れで、1試合目後の作戦タイムで、ルール調整を行っていた。例えば、自分のチームはリングに当たれば1点もらえる、相手チームはドリブルしないなど、ルールを変えることが、一層ゲームを楽しめる要因となっていた。



写真⑩：バスケットボールのプレイ



写真⑪：アダプテーションの掲示

バスケットボールの楽しさや喜びは、パスをつなぐ、シュートを決めることである。そこで、マスターカードを作成し、単元終了までに各児童100ゴールを目指して取り組んでいた。

(7)6年生 ゴール型ゲーム「ハンドボール」
(単元名) 全力プレー！つなげてシュート！
思いやりカップ2024

<6年生 仮説に対する手立て>

(仮説1) 自己効力感

①チームカードの活用

(仮説2) 自己有用感

①チームカードの充実
②チームでの準備運動

(仮説3) 自己調整力

①学習過程の工夫

体育の授業の中で、ハンドボールはあまり馴染みがないものであったが、児童は楽しそうに生き生きと運動していた。運動場で行い、当たっても痛くなく、ある程度重く投げやすいボールを選ぶことから研究が始まった。

授業はゴールキーパーを置かずに3対3で行い、ゴールがねらわれそうになると、チームの1人がさっとキーパーとなっていた。コートごとにゴールの大きさが違っていたが、

ゴールに応じてシュートの仕方を見童が考えて動いていた。



写真⑫：ハンドボールのプレイ



写真⑬：学習カードの記録とハンドボール

5. 成果と課題

令和2年度から積み上げてきた自尊感情に関する成果では、まず、「自尊感情に関する調査」や現在まで続いている「心と体の健康観察」から、児童の実態が見えてきたことと、その結果を受けて児童に丁寧な声かけができるようになってきたことである。

学級経営の基盤として、確実に道徳科と学級活動(1)を行うために、令和3年から実施記録表を職員室の廊下に掲示した。学級会の議題、柱を書くことで、教師の参考になった。本校は、古くから継続的に特別活動の研究実践を深めている学校である。そのこともあってか、児童は自分の考えを理由づけて発表できる子が多い。

道徳では、授業時数35時間を確実に実施するために、授業を行ったら教材名にシールを貼り、授業の進捗状況を可視化した。担任教師にプレッシャーがかかることもあるが、意

識が高まり確実な授業時数の確保ができ、また地域へのアピールにもなった。

学習活動の掲示（カラ段）を用いて学習に取り組んでいること、川小スタンダードを意識して授業を行うことができてきたことなども成果である。

9 自尊感情の低い児童はいますか。	
	6月
①いる	70%
②いない	30%
10 9で①いると答えた方、その児童は、体育が好きだと思いますか。	
	6月
①好き	20%
②どちらかという好き	40%
③どちらかという嫌い	40%
④嫌い	0%
11 自尊感情の低い児童は、体育科を通して向上しましたか。	
	2月
①向上した	75%
②どちらともいえない	19%
③向上していない	6%

先に述べた、体育科指導を行う教師の意識について実態調査した中に、担任教師には、自学級に自尊感情の低い児童がいるかどうかを尋ねた。「9-①いる」の70%は16人の児童である。そのうち75%に当たる12人が向上したと捉えている。その理由として、「自分から進んで話合いや活動に参加するようになった。」「体育の中では、とてもポジティブになった。相手チームが得点した時に「ナイス」など声をかける姿もあった。」「苦手や不得手と感じている児童が、授業の中で楽しさやできるようになった達成感を得られ、休み時間に練習している姿も見られた。」「自分から見つけたよさを伝えるなどし、友達と関わり合い学ぶことで、自尊感情が向上したように思う。」「友達からの励ましがあったから。」

「友達にがんばりを認めてもらい、楽しく取り組んでいたから。」「チームで活動する機会が多かったから。」「その子の得意な単元で、友達にみんなの前ではめられて嬉しそうにしていた。」「スモールステップや声かけなどで少しは上がったと思う。」などである。つまり、自尊感情の低い児童は、チームの仲間と活動を共にする中で仲間からの承認、励ましなどの言葉かけを受けて自尊感情が向上したと考えられる。

また、令和5年度の研究構想図（資料1）に示した生活体育プロジェクトの取組の中に、「体力貯金カードの活用」「外遊びキャンペーン」がある。夏休みの課題の体力作りの取組が「体力貯金カード」である。得点化し、合計が500点以上の児童は、給食中の放送で名前が読み上げられる。また、「外遊びキャンペーン」は、運動委員会とコラボし、例えば逆上がりを教え、できるようになったらカードにスタンプが押される。できた評価が目や耳に可視化されたことも、自尊感情が向上した一因と考えられる。

課題は、自尊感情の評価が見えにくい点や、具体的な声がけのレパートリーを増やしていく必要があることである。

また、体育の技能や体力が高まったかどうか、はっきりと検証することができなかった点である。令和6年度では、新体力テストの結果を掲示し、後日もう一度検証していきたい。

6. おわりに

令和4年度から体育科で行ってきた本校の学校研究は、令和6年度に埼玉県西部地区小学校体育授業研究会と川越市教育委員会委嘱・川越市教育研究会委嘱を受けて発表する。

体育の技能と体力を向上することと、自尊感情を向上するという2つの目的を持っている。この2年で実践してきたことを更に積み上げていくとともに、様々なご意見を頂き、

児童に還元できるよう実践していきたい。

【注釈】

- 1) 鳴門教育大学予防教育科学センター研究補佐員の横嶋敬行氏の協力を得て、本校児童4年生～6年生の自尊感情の状態を明らかにした。その結果、本校の4年生から6年生の児童の潜在的自尊感情は、比較的高い傾向にあることが分かった。また、登校児童と不登校傾向児童の潜在的自尊感情の比較では、不登校傾向児童の平均値が低くなっていることが分かった。詳細は、拙稿「児童の自尊感情を育む学校研究—教科・領域での指導や授業の改善を目指して—」『文教大学教育研究所紀要』第31号、2022年、pp.110－111
- 2) スタンフォード大学教授で心理学者のアルバート・バンデューラ博士によって提唱された概念。
- 3) 国立教育政策研究所、『「自尊感情」？それとも、「自己有用感」？』、平成27年
- 4) 高橋さなえ「産業保健新聞」2018.6.14
- 5) 令和6年6月に行った体育授業に関する現状調査。質問紙で令和5年と同様の質問紙。調査人数は33人。内24人が担任教師で9人が担任外教師。
- 6) 高橋健夫編、「体育授業を観察評価する」明和出版
- 7) 拙稿「児童の自尊感情を育む学校研究—教科・領域での指導や授業の改善を目指して—」『文教大学教育研究所紀要』第31号、2022年、pp.111－112、119

(資料1) 令和5年度 研究構想図

